

A Window Open to the World

梶山女学園大学国際交流センター一報

本学の国際交流事業における課題

国際交流センター長 長谷川淳基

国際交流センター長の任期が満了するのを機に、現時点での本学国際交流の課題2点について記します。

一つは新しい留学制度の導入についてです。本学学生が海外で学ぶことに関しては、梶山女学園大学にはすでに様々なプログラムが存在しています。ここでいう新しい留学制度とは認定留学制度のことです。公的に認定された海外の全大学等から学生が留学先を自らの意思で選択できること、そしてその留学期間を本学での修業年限に算入することが、この制度の特徴です。単位認定の方法については、梶山女学園大学の交換留学制度に関して各学部が定めている単位認定ルールを、この認定留学制度にも適応することになるでしょう。



近隣の大学また日本の大学の状況からして、本学も早急にこの認定留学制度を導入すべきことは明らかです。こうした考えのもと、国際交流委員会は認定留学制度案を作成しました。すみやかに本案が実現することを期待します。

もう一つは交換留学制度の充実についてです。この点に関しても、本学はすでにオーストラリアの複数の大学ならびに中国の一大学と交換留学協定を結んでおり、毎年の実績を積み上げ今日に至っています。しかしながら、さらなる充実また拡大の余地は十分に残っています。具体的には、英語圏の協定大学を増やすこと、中国のみならず他の東アジアの国々に協定大学を持つことが望まれます。

協定大学新規開拓の業務には様々な困難が伴います。交渉担当の教員には新たな業務負担となります。日々の教育・研究・その他の業務を果たしつつ、その新しく生じた任務をも抱えることとなります。同僚教員、事務方、大学組織全体でこの点について、すなわちそうした任務にあたる教員の状況と負荷について改めて理解と配慮がなされ、協力と助力がなされねばならないでしょう。

上海師範大学交換交流10周年記念事業

(2012.11.9)

今年上海師範大学との学生交換交流10周年の記念の年でした。その記念の年に、上海師範大学から対外漢語学院の齊滬揚院長、国際交流処の夏広興副処長、女子文化学院の王肖練氏の3名を招聘。さらには、上海師範大学から椋山女学園大学に受け入れた交換留学生OG9名も、この日のために上海より来日しました。当日は、夏広興副処長の記念レセプションでの来賓挨拶に続き、OG代表として椋山女学園大学への交換留学第1期生である金珊さんの日本語でのスピーチがなされました。スピーチは、留学当時の思い出と関係者への感謝



の気持ちにあふれ、金珊さんは取材で訪れていた新聞記者の質問にも笑顔で応えていました。

すばらしいスピーチに続いて、今年で4回目を迎える交換講演が行われ、王肖練氏にブランド化粧品のCMに見られるスローガンの変化とフェミニズムの発展についてお話しいただきました。その後の懇親会では、当時のホストファミリーや上海師範大学に交換留学生として派遣された椋山女学園大学のOGなども加わり、旧交を温めていました。



コラム 私の国際交流実践

We're The Nagoyans!

国際コミュニケーション学部教授 木村 隆

Nagoyanというのは、名古屋人なら誰でも知っているあの饅頭の英語表記ではありません。テキサスの住民のことをTexanと呼ぶのと同じように、「名古屋人」を英語で表現しようとするのがNagoyanになるのです。

“We're The Nagoyans!” (『私たち、名古屋っ子!』)は、本学主催の留学プログラムに参加する学生のために、私のゼミの有志が作成した英文名古屋紹介パンフレットです。留学先のホストファミリーや友人に日本や名古屋のことを話す際、ビジュアルなものがあれば話しやすいだろうとこのパンフの作成を思いつきました。昨年度第1号を発行し、国際コミュニケーション学部や文化情報学部主催の各種留学プログラム参加者をはじめ、国際交流センターが派遣・受入れをしている交換留学生に配布しました。また、このパンフのことが新聞で紹介されたため、一般市民からも送付の要望が寄せられ、大学を通して送付したパンフが草の根の国際交流にも役立っていると聞いています。第1号では名古屋の基本情報と名古屋めしのほか、名古屋城、徳川園などの史跡や施設、につぼんど真ん中祭りなどのイベント、そして椋山女学園大学、および星が丘テラスについて英語で紹介しました。

本年度は第1号に修正を施し、内容をボリュームアップさせた第2号を発行しました。第2号で新たに取上げたのは、大須、トヨタ会館、名古屋港、モリコロパーク、SKE48などです。本センター報が世に出る頃には、春休みを利用して留学に出かける学生たちが、このパンフを使って名古屋や椋山のことをアピールしてくれていることと思います。

“We're The Nagoyans!”は、初めて名古屋を訪れる外国人にとっても格好の名古屋入門書となります。椋山に留学生として入学する人たちにはぜひこのパンフを読んでいただき、名古屋での生活を通して本物のNagoyanになってほしいと願っています。



▲ オーストラリア協定校訪問

(2012.8.25~9.2)

毎年オーストラリアの協定校であるキャンベラ大学、タスマニア大学などを訪問しています。今年は現代マネジメント学部のロバート・ジー准教授(国際交流委員)と小林正典学生課長が訪問しました。まず、平成24年度の本学の派遣交換留学生と懇談することで、現地の様子や今後の留学制度のあり方を確認し、実際に留学生が居住し



ている寮を視察しました。また、キャンベラ、タスマニア両協定校の留学担当部署スタッフとの情報交換や、日本語学科の学生を対象に、交換留学制度や学生生活などに関するプレゼンテーションを行うことで、本学への理解を深めていただきました。

最後にシドニー大学を訪問し、協定校締結の可能性について、意見交換を行いました。



▲ 上海師範大学協定校訪問

(2012.11.22~24)



オーストラリアの協定校と同じく、中国の上海師範大学へも毎年訪問しています。今回は文化情報学部の季増民教授(国際交流委員)と小林正典学生課長が訪問し、日本語学科の学生に対して、交換留学制度や学生生活などについてプレゼンテーションを行いました。また、国際交流処を訪問し、10周年記念事業の来日に謝意を表明、対外漢語学院では、交換協定などに関して意見交換を行いました。

さらに、平成24年度の本学の派遣交換留学生と懇談し、現地での生活や学習の進捗状況などを聞いたところ、充実した留学生活を送っているようでした。



▲ 受入交換留学生修了式

(2013.1.26)



森棟公夫学長はじめ、多くの参加者のもと、平成24年度の受入交換留学生の修了式及び送別会を開催しました。

タスマニア大学から2名、上海師範大学から3名の計5名の留学生に対し、森棟公夫学長から修了証書が一人ずつ手渡され、祝辞が述べられました。さらに、1年間留学生を見守ってきた宗林由佳日本語担当教員からは、1年間の学習ぶりを振り返りながら、お祝いの言葉が述べられ、留学生は上達した日本語でお礼のスピーチをしました。

修了式後の送別会には、お世話になったホストファミリーや留学生活のサポート役として交流したスタディメイトらの在生学生も参加しました。受入交換留学生による歌や踊りで、送別会に華が添えられました。



平成25年度 受入交換留学生決定!

上海師範大学から3名の留学生を受け入れることになりました。



李 安妮さん



鄭 明心さん



周 佳依さん

日本文化体験学習を実施しています!

国際交流センターでは、例年受入交換留学生に、キャンパス内では味わえない日本文化を体験してもらうため、学外研修を実施しています。

前期に引き続き後期は、歌舞伎鑑賞、瀬戸焼体験、友禅染体験、郡上八幡見学など、今年も充実した内容となりました。

徳川美術館・徳川園

2012.9.22



愛知県の陶芸文化、特に戦国時代の陶芸文化を学ぶために、徳川美術館・徳川園・愛知県陶磁資料館を見学。陶芸館では、焼き物の絵付けにも挑戦しました。

歌舞伎鑑賞

2012.10.2



「日本事情IA」の授業では、名古屋市中区栄の御園座で歌舞伎を鑑賞しました。双蝶々曲輪日記 角力場、棒しばり、助六由縁江戸桜の演目を鑑賞しました。

瀬戸焼体験

2012.10.19



愛知県の地場産業でもある赤津焼(瀬戸焼のひとつ)の窯元を見学。伝統工芸について理解を深めた後は、ろくろを回して実際に瀬戸焼を作りました。

能体験

2012.11.16



「日本事情IIA」の授業では、能楽の仕舞や地謡を体験。中国の仙女もしくは羽衣の天女の装束を着付け、実際に舞台上で使用される能面も身に付けました。

友禅染体験

2012.11.17



地元名古屋の伝統工芸である友禅染の体験を通して、日本文化の一端に触れました。実際に染料を使用し、留学生たちは真剣な表情で取り組んでいました。

郡上八幡見学&体験学習

2012.12.8



水の街郡上八幡を流れる水路を散策しながら、城下町の歴史文化に触れました。郡上踊り、鍾乳洞、食品サンプルなど郡上八幡ゆかりの見学体験を行いました。

キャンベラ大学に留学して

国際コミュニケーション学部 菅沼真由

キャンベラ大学への留学は、私に「自分が何をどのように学ぶべきなのか」を気づかせてくれました。

留学が決まったのは、大学1年目の春休み前でした。日本の大学のルールをなんとか理解し、授業やレポートに必死になっていると、大学生活1年目はあっという間に過ぎてしまいました。当時の私は、大学で学ぶことの意味をよく理解しておらず、自分が何を深く学びたいのかも決まっていませんでした。

そんな状態で留学生活が始まり、まずは語学学校で半年間、英語をひたすら勉強しました。キャンベラ大学では必要な英語のルールなども学びました。そして半期が終わり、さあ、大学の学科で勉強ができる！となった時、私はどの授業を取ればいいのか、すぐに決めることができませんでした。それまでは、英語を完璧に習得することが目標でした。けれども、私はこの英語を使って何がやりたいのだろう…。そんなふうを考えるようになりました。もちろん、英語を話せるようになることは、それだけでも大変なことです。しかし、せっかく自分が手に入れた英語という武器をどのようにして使うかは人それぞれです。私はその自分なりの方法を見つけなければならぬと気づかされました。

英語を学ぶ学生であれば、ほとんどの人が一度は留学をしてみたいと思っているでしょう。しかしそれが漠然とした目標となっていないませんか？まずどこに留学すべきか。英語が公用語の国はいくつかあります。その中でもどの英語を学びたいのか。たとえば、アメリカ英語なのか、イギリス英語なのか。次にその国で具体的に何をしたいのか。生きた会話を学ぶのか、アカデミックな英語を学びたいのか。このように自分の留学像を細かくイメージしてみてください。そして留学を終えた後、その留学をどのように活かしていきたいのかも考えると、さらに良いと思います。そうすることによって、限られた留学期間のなかで、最大限に成長できると思います。



トガという衣装を着て行われるパーティー。みんな思い思いに白い布をアレンジしていました。



キャンパス内にあるカフェ



ハウスメイトとの記念写真

コラム 旅と研究と私



歴史の現場を訪れて

現代マネジメント学部教授 山澄 亨

数年前、ハーヴァード大学のホートン・ライブラリーで史料を閲覧していた際、私の机の正面にセオドア・ローズヴェルト元アメリカ大統領の大きな肖像画が掛かっていました。彼から叱咤激励されているような気になり、幾分緊張しながら史料を読んでいたことをよく覚えています。「そういえば、セオドアもハーヴァードの出身だったなあ。きっと、このキャンパスを歩いていたに違いない」と休憩中に散歩しながら思ったものです。

アルゼンチンのブエノスアイレスにある「ピンクハウス」と呼ばれている大統領官邸を訪れた時には、エバ・ペロン(エヴィータ)が、自分の死期を知りながら国民に向かって演説したバルコニーを眺めていると、意外に国民との距離が近いと感じました(ホワイトハウスが、フェンスからかなり遠くに建っているのとは対照的です)。もちろん、「エヴィータ」という映画やミュージカルで扱われている名場面の舞台を実際に訪問することができたという感動を得ることができました。

マドリードの広場にあるカフェで食事をしていると、スペイン内戦末期には、食料不足で多くのマドリード市民が飢えていたことを思い出され、「この広場でもお腹をすかせた人々が行き交っていたのだろうなあ」と平和のありがたさを実感しました。

書物を読んだり、インターネットで調べることで歴史を知ったつもりになっても、どこか物足りないものです。当時の雰囲気を残している風景、あるいは、当時とはすっかり変わってしまった風景であっても、想像力をかき立たせてくれます。そうした想像力こそが、次の研究の活力になっていきます。想像力は、歴史研究にだけ必要とされるものではありません。生きていく上で、とても大切なものです。歴史の現場を訪れることで、想像力を膨らませる経験を多くの人に味わってもらいたいと思います。



ハーヴァード大学ホートンライブラリー

梶山女学園大学に留学して

ドワイヤー・キャサリン



日本に来る2年前、私は人文学と法学を専攻して大学を卒業しました。学部の最後の2年間は、純粋に法律関係の勉強ばかりでした。日本語を勉強していた頃からすでに4年も経っていたので、うまくコミュニケーションをとることができるのか、とても不安でした。この交換留学でオーストラリア人留学生は私一人だけでした。

留学開始当初、日本での生活は大変でした。大学生活はオーストラリアとはまったく異なり、授業も2倍近く長く、昼の休憩時間は決まっていますが、オーストラリアの大学にあるようなバーやジムもなかったのです。それでも、週が進むにつれ、ゆっくりと、私の語学力は上達していきました。そして、ほかの人と交流し、理解できるようになりました。

梶山女学園大学のみなさんの助力、支援、忍耐がなければ、こんなに早く生活に慣れることはなかったでしょう。国際交流センターの方々は多くの面で私を助けてくれました。那須さんは初日にランチに連れていってくれて、寮周辺の案内もしてくれました。先生方は理解があり、辛抱強く、そして熱心に助けてくれました。中国からの交換留学生仲間たちとは、お互いが経験していることを、ことばを交わさずとも理解できました。梶山の学生たちも、交換留学生が生活に慣れて、素晴らしい時間を過ごせるよう、多くの努力をしてくれました。勉強仲間も、必要なときにアドバイスをくれたり、勉強を手伝ってくれたり、料理や買い物、映画など一緒に楽しい活動をしてくれたりと、大変助かりました。

私の授業はマンツーマンのもので、初めは少し大変でした。マンツーマンということは、その分、より一生懸命に勉強しなければならなかったからです。けれども次第に、この方法で学習することを楽めるようになり、大人数のクラスよりも早く上達し、先生方のこともより深く知ることができました。

寮での生活は、はじめは少し寂しいものでした。私はこれまで一人暮らしをしたこともなかったし、特に英語を話せる人がいないなかで孤立した感じがしたからです。でも、その感じは、長くは続きませんでした。料理やお菓子をシェアしたり、日本のものすごく大きな蜘蛛から守ってあげたりして、すぐにほかの交換留学生たちと打ち解けて良い隣人になりました。

私の交換留学はあっという間に最初の4カ月が経ちました。これは、到着してすぐに恐怖や不安が消え去り、ずっと楽しく過ごせたからだろうと思います。今までにあった、私のお気に入りの行事は、学校の旅行で京都に行ったことと、語学ボランティア・サークルのウェルカムパーティ、そして梶山の学生と一緒に参加した文化交流授業です。

日本に来る前、私は不安を感じていましたが、今までここで過ごしてきた時間をとても気に入っていますし、これから先6カ月も、より素晴らしいものになると想像しています。



私の留学体験記

国際コミュニケーション学部講師 柴田亜矢子

結局ロンドンに7年もいることになってしまいました。はじめは1年で帰国し、日本で博士号を取るつもりだったのに、渡英後4ヶ月でこのプランは一変しました。イギリスで博士課程に入るようになったからです。

ロンドン大学ゴールドスミス校は、私の恩師の卒業校でもあります。世界でも著名な彼女の弟子、ということで、過度に期待されての入学となっていました。しかし、現実はもちろんそう簡単には行きません。

1年目は、馬車馬のように勉強し、春先で息切れ、夏までテニス三昧。2年目からは同大学のSOAS (The School of Oriental and African Studies)で日本語教員養成コースに入り、博士論文はそっちのけで実習をエンジョイ。同じ年の後半から地獄の論文執筆。半年間で1チャプターを12回書き直し、2週間に一度5,000字加えて提出し続けました。そしてようやく中間審査に合格し、正式に博士課程の学生に認定されました。

3年目からは、現地エリート小学校や外国語専門の高校で日本語を教えながら、博士論文を執筆する日々が続きました。この体験も七転八倒。小学校のこどもたちはエリートだけあって優秀そのもの、何の問題もない、と思いきやたまたま私の授業をイギリス政府が授業参観することに。結果としては、参観された文部省の方も、日本語を子供たちと一緒に発音練習してくれて大成功とはなったのですが…。現地高校で夏に行われた2週間の日本語コースは、本当に大変でした。高校生が秩序というものを知りません。私は彼らよりも背が低く、アジア人のためか若く見られたので、なめられても仕方がなかったのです。ついには机に登って 'Oi!!!!' と叫ぶ始末でした。しかし、コースの終わりに別れを惜しんで泣いている女子学生(ものすごい化粧が濃い)や、ワインのプレゼント(ブルガリア人の女の子で、ブルガリアワインでしたが、ものすごく美味しかった)をもらったりして、これも結果としてはいい思い出となりました。

私の珍留学をしめくくったのは、博士論文の口頭試問にmajor amendmentがでて18ヶ月卒業がのびたことです。決まっていた日本での非常勤講師の職をすべてお断りし、1年ロンドンにとどまることになりました。この1年こそが、最大の山でした。論文が次に落ちたら、私の7年間の苦労は水の泡です。パソコンを開く前に毎朝祈りました。この1年間で、どれくらいの本を読み、どれくらいの英文を書いたのでしょうか。しかし、最もつらかったのは、自分の力を信じられなくなったことです。それまでの私は、まあ、なんとかかなと思っていました。そんな自分を信じられなくなったこと、それが一番の山であり、またその経験こそ、一番の宝だと思います。英語圏に留学することの意義は、英語をマスターすることだけではないのです。



認定留学制度の創設を検討中

学生が本学の交換・派遣留学制度によらずに外国の大学、大学院、短期大学、またはそれらの付属の語学学校に留学した際に、留学中に修得した単位を、椋山女学園大学の単位として認定するための「認定留学制度」の創設を進めています。認定留学期間中も本学の在学期間として取り扱いますので、休学することなく4年間での卒業も可能です。学費は、本学と留学先の授業料をともに納付する必要がありますが、経済的な支援として奨学金制度の創設も検討しています。詳細は説明会等でお知らせしますので、留学を検討されている方はぜひ参加してください。

新規交換留学協定締結を推進

現在、ニューヨーク市立大学リーマン校との学生交換留学協定を検討しています。半期の留学期間を基本とし、定員3名程度を予定しています。協定締結が完了すれば、交換留学説明会等で告知、案内させていただきます。語学力をそれほど必要としない留学で、4年間での卒業も可能ですので、留学を検討されている方はぜひ参加してください。

国際交流センターでは、留学に関わる様々なイベントを企画、開催しています。また、留学に関する様々な疑問や質問に対して、不安を取り除けるよう相談にも応じています。気軽に椋山人間交流会館1階の国際交流センター(CIEP)までお越しください。



学内の国際交流に関する記事の投稿や話題提供をお待ちしております。国際交流センターへの提言、国際共同研究や学生交流の紹介、在外研究の報告やエピソードなど、600字程度で御寄稿ください。写真もご提供いただければ幸甚です。

編集後記

A Window Open to the World 第3号ができました。タイトなスケジュールにもかかわらず、執筆・編集に御協力いただきました皆様に、厚く御礼申し上げます。創刊当初は、1年に2回も刊行できるだろうかと不安でしたが、国際交流センターの多彩な取り組みや、教員・学生のユニークな経験や活動について、毎回多くの情報をお寄せいただき、順調に発行し続けることができました。今後、協定校の増加や、学部レベルの国際交流の多様化も踏まえ、紙面のさらなる充実を図ってまいりたいと存じます。御意見、御感想などお寄せいただければ幸いです。

2013.3.18 (K.H)

ご意見・ご要望などはこちらへお寄せください。

椋山女学園大学国際交流センター

TEL:052-781-5674(直) FAX:052-781-2038 E-mail:ciep@sugiyama-u.ac.jp